

戦後東アジアの支配はテロルによって……

——「済州四・三第五〇周年記念国際学術大会／二十一世紀東アジア平和と人権」参加の記

八月二十一日から二十四日までの四日間、韓国の済州島で、「済州四・三」五〇周年記念国際学術大会／第二回東アジア平和と人権国際シンポジウム」が開催された。昨年台湾台北で開催された、台湾二・二八事件五〇周年記念／第一回国際シンポジウム「東アジアの冷戦と国家テロリズム」に続く、二回目の大会である。

今回は「四・三事件」と呼ばれる、凄惨な国家テロル＝島民大虐殺事件を顕彰する行事としての役割も果たしているとあって、盛大な大会であった。A四版の概要論文集は二四〇頁を超えていて、まだ収録できないものもあるほどだった。早朝から晩までのセミナーにおける報告はしばしば早口になり、同時通訳を戸惑わせていた。毎晩の夕食も八時に始まることはなかった。

内容は東アジアの冷戦と民衆、冷戦体制暴力と東アジアの女性、冷戦体制下の良民虐殺の実状などで構成されたが、詳しくはおって発行される『報告集』を見て貰うしか、ここでは説明のしようがない。昨年の台湾大会の報告は、本誌九七年九月号に高地燿子が書いているので、そちら

も再度読んで貰いたい。

さて、わたしは二十日午後成田発、釜山経由で夕方済州空港に到着した。思ってもいない横断幕に迎えられてバスでホテルへ。事務局の面々に会場等の案内を受けて、いったん部屋へ入って荷物を整理し、食事に向かった。昨年小野悌次郎が取材で訪れたさいに招待された「チョウウォン（草原）」という店にタクシーに分乗して行った。食後分かったことだが、この店は歩いても五、六分のところだった。うまいカルビを喰い、韓国ビールと焼酎、それにマッコルリを飲んで旅の疲れを癒した。成田からの同行のメンバーとは言え、それほど詳しく知っている訳ではない面々であったが、よくよく聞いていると、社会運動家の集会のような焼き肉パーティーだった。政治犯釈放運動や花岡裁判支援などの人権運動、日の丸掲揚等に反対して処分を受けている教員組合の運動家、朝鮮の分断史を日本人の立場から追求する研究者などそうそうたる面子なのだ。

さて、翌日午後三時いよいよ大会が始まるが、その前に時間がある。わたしは他の三人と連れだってドライブすることにしたのだが、あてにしていた人の国際免許がこの八月はじめに切れていることが分かった。しかし、レンタカーセンターのおねえさんが親切で、タクシーを紹介してくれた。「気分いい人だから」と言う。タクシーを半日借りて九万ウォン。チップを払っても一〇万ウォンだ。価格的にはレンタカーより安いくらいだ。おねえさんは電話をかけて「いまどこにいるの」なんて言っている。親しいらしい。本当に良い人でガイドまでしてくれて、漢拏山（ハ

ルラサン) 登山にも付き合い、ちゃんと三時にはホテルに着いてくれた。威張りもせず、嫌なこ
と一つ言わない。二八、九の青年だったが、お姉さんが東京にいると言っていた。

ヨンシルというところから時間の許す限り山登りをし、昔ゲリラが喉を癒していただろうせせ
らぎを渡った。天気も良く、気持ちよい山歩きではあったが、些か疲れた。運転手さんはへばっ
たわたしともう一人の年輩者をおいて、先に行った二人を呼び戻しに走って登ってくれた。私た
ちは海拔一四〇〇メートルの標識のところまで待っていた。

その後天地淵(チョンチョン) 溪谷と、正房(チョンバン) 瀑布を見学した。この正房瀑布は
崖から落ちる川の流れが直接海に落ちている珍しい灌で、四・三事件当時は、洞窟に隠れていた
多くの村人がここから突き落とされたところだ。何はともあれ、われわれ四人と運転手は時間も
ないので腹を満たしに店を探した。運転手は西帰浦のこの辺りに来るのは久しぶりだと言うので、
他の運転手に聞いてくれたのは良かったのだが、予想より高めの昼飯になってしまった。鯛やイ
カの刺身は美味かったので我慢しよう。それにこのあとはあまり外で食事する機会に恵まれな
かったのだ。

ぎりぎりで午後三時にホテルに到着したわれわれは会場に入った。歓迎式の前に劇団ハルラサ
ンによるマダン劇「4月・ハルラサン」の公演があった。マダン劇というのは舞台の無い劇であ
るから、観衆が囲む中で演じられた。劇は一九四七年三・一独立運動記念集会の現場から翌年の

四・三蜂起、島民にたいする討伐、鎮圧と進んでいく。チャンゴ等の民族楽器のリズムとともにストーリーが展開されていき、なかなかの迫力である。歴史の事実を忠実に追いながら、芸術的に昇華し、その渦の中に観客を巻き込もうという試みである。

本番の集会は詩人文武秉の済州言葉による詩の朗読に始まった。そして韓国委員会代表で歴史家の姜萬吉の開会辞のあと、作家玄基榮、済州道知事、議会議長らの挨拶がつづき、祝辞も届いた。韓国史の禁忌とされてきた四・三事件が韓国社会に完全認知された瞬間である。続いて東チモールのラモス・ホルタと日本の田英夫による特別講演があった。すべての挨拶が終わって、九時近くなってやっと晚餐がはじまったのだが、わたしは疲れていた。登山が崇ったのかも知れない。食欲もないし、晚餐が始まってすぐに、五人部屋にひとりで戻って、シャワーを浴びて床に着いてしまった。従って晚餐後の東チモール闘争のビデオも見なかった。わたしの部屋は五人部屋と言っても、ダブルベッドの二人部屋に五人詰め込むという雑魚寝状態である。もともとユースホステルを宿舎にするという予定だったものが急遽変更になって、新済州市にある高級大ホテルになった。不況のせいか、このホテルに限らず街は空いている。観光客は少ない。だいぶ値切ったようだ。

よく寝たので翌朝は元気だった。早めに七時から朝食にし、ひとり残して同室の四人で済州市内へ行くことになった。タクシーに乗って三十分くらい走ると観徳亭前についた。警察まえの広

場の正面に観徳亭の古風な建物がみえる。金石範の小説「観徳亭」はこう始まる。昔の軍事訓練場のようなどころだったらしい。小説では「でんぼう爺い」とよばれる奇怪な老人が登場するのだが、さすがにそうした老人は見あたらず、しかし、警察署は確かにあった。この警察署で多くの人民が拷問を受けたのだ。小野悌次郎が四・三研究所を訪ねてみようと言うので、探してみることにした。四・三研究所は四・三事件の事実発掘を旨とする団体で、その研究員たちは今度のシンポジウムでも中心になって働いている。わたしはさて、どうして探すかと思っていると、みんなはほとんど警察署に入っていてしまった。何と彼らは警察官に四・三研究所の場所を訪ねているのだ。「四・三」という言葉はついこのあいだまでタブーであった。いや、「四・三」の事実を掘り起こすことは、反共国家「大韓民国」成立の正統性を問うことであり、実際に「四・三」を追及した映画「レッド・ハント」の上映会を企画したことにより、徐俊植さんが逮捕されたりしている。なのに、警察官はわれわれを長椅子に坐らせて、地図で場所を確認している。小野さんが向こうの階段を眺めながら、この二階で拷問があったんだな……などと呟いている。やがて位置を確認した警察官はわたしたちを促して「車で来ているか」などと聞く。違うと言うと、なんと車に乗せてくれた。かくしてわれわれ四人は、パトカーではないようだったが、制服の警官が運転する車に乗って四・三研究所の下まで送って貰ったのである。時代は変わったと言うべきか……。

ところが、案の定誰もいなかった。多分研究員たちは、自宅から直接会場に向かっている最中であろう。まあ、路地を入った小さな建物の二階にあることや、近くにモギョットンと呼ばれる風呂屋があることなど、雰囲気が分かっただけでよしとしなければならない。さっき来た観徳亭の方へぶらぶらと歩いていくと、右手の道奥に市場が見える。韓国に来て市場を覗かなくてはい。シジャンと呼ぶ市場を歩かないで他に歩くところはない。韓国文化の全てがここに集中しているのだ。というわけで日本人のおっさん四人組はそろそろと入っていった。しかし時間がない。すでに会場では七時五十分から済州四・三闘争関連のビデオ上映会が始まっている。これは日本で観ているのでサボっても、九時開会のシンポジウムに遅れる訳にはいかない。ゆっくり見てはられないが、それぞれチョジャンやらゴマの葉やら何やら買っついていそいそと帰ることにした。

これからは勉強に続く勉強である。済州島における良民虐殺、台湾の白色テロリズム、光州人民弾圧、沖縄の反基地闘争と人民弾圧等二十名にも及ぶ意見発表と報告が続いた。シンポジウムは「東アジア冷戦と民衆」「冷戦体制下の暴力と東アジア女性」「冷戦体制下の良民虐殺の実状」「東アジア平和と人権運動の連帯と展望」等を主題として展開されたので、やがて発行される報告集を読んで貰いたい。特に国家テロルによる女性被害に関しては、事実の掘り起こしに基づいた実に先鋭的な意見発表が続いた。日本、沖縄、台湾、済州島、光州の被害の実態が浮かび上がり、また、政治学的、哲学的、精神医学的な立場などさまざまな視点からの分析が発表され、現

在的問題として捉えようという斬新な試みであった。

遊んでいる時間は殆どなかった。大会二日目の夜遅く、海辺にいったい飲みに出たくらいだ。鯖や太刀魚の刺身はうまかったが、そう長い時間楽しむこともできなかった。二十三日は雨だったが、一歩も外に出る機会がなかったので困らなかった。

シンポジウムから直接学んだものも大きいが、内外の多くの活動家たちと知り合えたことも大きな実りであった。この三月に出獄した崔夏鍾さんは三十六年の長きに渡って獄中に囚われていた方だ。一九四五年の解放のときは「満州」の龍井あたりをいたらしいが、解放前後の朝鮮北部の実状に関する貴重な証言のできる方でもある。彼が革命を志したのは十八歳のとき、解放を迎えたことによる。八月を待たず、四月頃から郡庁には赤旗が翻っていたというから、血気盛んな青年は皆革命家になろうとしたのだろう。朴正熙ファシヨ政権下の南朝鮮に南派され、地下党の建設を企てたがすぐに逮捕されてしまった。徐勝さんが獄中でもっとも尊敬した先輩だと紹介した（注記）が、どれだけ多くの、逮捕された韓国の民主運動家たちに影響を与えたのだろうか。台湾からの参加者も多く獄中に囚われ、また夫や家族を殺された人々であった。晩餐の時間や、僅かなコーヒーブレイクにそういったひとたちと直に話し、生の声を聞くことができるのだから、シンポジウムにも身が入った。

最終日の朝韓国・台湾・日本・沖縄の各事務局からアップील文が発表され、また全体のまと

めとして「東アジア平和憲章」が採択された。何となく牧歌的な文章だ。

そして、やっと外に出られた。フィールドワークで、AコースとBコースに分かれてバスで出発した。Aコースに参加したメンバーは、「四・三」当時、村人が六十日間もの長い間隠れていたという直径六十センチくらいの狭い洞窟を体験して、泥だらけになって帰ってきたが、わたしの参加したBコースは、零戦の基地跡や、朝鮮戦争のときに予備検束されてそのまま殺された人々の墓地など、それぞれ隠された歴史遺産の地の踏査とはいえ、安全なバス旅行だった。この日の昼飯は途中の食堂を予約していたのだが、とても美味しかった。メウンタンという辛い鍋物にうどんが入った簡単な料理だったが、久しぶりに外の空気を吸って食べたせいか、ホテルの食事がうまくなかったせいか、本当に美味しかった。勉強も良いが、たまには美味しいものの食べ歩きがしたい。食後済州市に向かってドライブ。市内で画家姜堯培（カンヨベ）の展覧会を見学。済州島の歴史を解きほぐし済州抗争に至る歴史画展で、反米傾向の強いリアリズム絵画である。こういった展覧会が堂々と開催されている。この見学でフィールドワークも終わった。

なにしろ良く学び良く学んだ。そして深夜は部屋で焼酎やマッコルリを呑みながら議論が続いた。小樽在住の哲学者花崎皋平さんは、金石範の『火山島』を良く読みこなしていて、私と同室の小野悌次郎が自著の金石範論『存在の原基 金石範文学』を持参していたせいか、毎晩のように部屋を訪れて文学論を交わしてくれた。わたしの文学論に関しても、上西晴治を読むように奨

めてくれた。

金石範は最終日の夕方やっと到着した。妨害をはねのけて、やってきた金石範は思いの外元気で、わたしたちの顔を見ると、「あれあれみんなで……」などと驚いてくれた。わたしは金石範と濟州島の作家玄基榮が並んだ写真撮ることができた。これは素晴らしいことなのだが、なにしろ二十年近く前に買ったカメラは性能が悪く、「ちよっとピンぼけ」である。金石範は、シンポジウムには間に合わなかったが、「濟州四・三抗争」を最初に小説に描き、ライフワークとした作家であるから、彼を迎えて話を聞く会が急遽持たれた。金石範は、在日の国籍問題に関して重要な問題提起をしたのであるが、これは『世界』十月号に掲載されている。最後の晚餐は金石範歓迎レセプションとなった。涼しい夜だった。

翌日早朝あわただしく出立しなければならなかったので、誰にもろくな別れの挨拶を交わせなかった。多少の心残りはあるけれど運動にとつてもわたし個人にとつても大きな四日間だったことに間違いはない。

ところで開催日の翌日、済民日報の一面に大きく写真が出ていて、わたしの後ろ姿が映っているのだが、これは手に入れ損ねた。しかし二十五日の朝、搭乗するときに取った済民日報には大会閉幕の記事が、やはり写真入りで掲載されていて、わたしの後頭部が写っている。あまり人に見せたくない後頭部である。

帰宅したわたしは、その夜インターネットを調べると、濟州日報に「金石範特講」という記事が写真入りで掲載されていた。戦後国家テロルによって構築された冷戦体制を再考する運動の中には、在日の市民権の問題も含まれている。戦後五十年を越えて、改めて戦後支配体制を考え直すとき、在日朝鮮人による日本語文学を含めた文学の位置も見極めなければならないだろう。

(注記) 徐勝著『獄中19年』(岩波新書) 96〜97頁に崔夏鍾氏に関する紹介が書かれている。